

日本英語音声教育史： 大谷正信が伝えた D. Jones の英語音声学

田 邊 祐 司

1. はじめに¹⁾

大正時代に「大正音声学ブーム」と呼ばれた英語音声学の学習ブームがあった（田邊 2015）。きっかけは第四高等学校教授で、文部省留学生としてロンドンに渡った大谷正信（1876~1933）だった。彼はロンドン大学（University College London、以下、UCL と略）で Daniel Jones（1881~1967）の音声学講座を受講し、その内容を『英語青年』に「ジョウンズ先生の英語発音学」と題して発表した（大谷 1913~1914）。連載は好評を博し、文法・訳読の変則式教授法が勢いを増しつつあった英語教育界において音声を重視した教授法への転換を求める気運を高め、やがてそれが大正時代の「音声学ブーム」につながったと考えられているのである（宮田 1967）。

このように大谷は日本英語音声教育史上、最初の英語音声教育の変革に一役買ったことになるが、この観点から大谷をとらえた研究は少ない²⁾。また、彼が受講した Jones の講座は音声学上の貴重な史料となるが、その内容がどのようなものだったかという点も明らかにはされていない。

以上から、この小論では大谷と Jones の両者にスポットを当て、前半部では大谷の足跡を中心に彼が英語音声教育に果たした役割を探る³⁾。後半部では大谷の記述から、若き Jones が UCL で実践していた英語音声学講座の輪郭、その指導内容の一端をとらえることを目的とする。

2. 大谷について

2. 1 大谷と英語音声

まず大谷の素描からはじめる。彼の英語を中心とした略歴が表 1 である。

表 1：大谷の略歴

明治 9 (1876) 年	島根県松江市に生まれる。
明治 20 (1887) 年	島根県尋常中学校入学。
明治 23 (1890) 年	Hearn が同中学校に赴任。英語指導を受ける(1 年 3 ヶ月)。
明治 25 (1892) 年	第三高等学校入学するが、9 月に第三高等学校に転校(学制改革のため)。
明治 29 (1896) 年	第二高等学校卒業。東京帝国大学文科大学英文科入学。再び Hearn の教えを受け、同時にアシスタントになる。
明治 32 (1899) 年	東京帝国大学卒業。
明治 35 (1902) 年	真宗大学(大谷大学の前身)教授となる。
明治 38 (1905) 年	東洋大学兼務講師になる。
明治 39 (1906) 年	京北中学校講師になる。
明治 41 (1908) 年	第四高等学校教授になる。
明治 42 (1909) 年	文部省留学生として英国留学。
明治 45 (1912) 年	帰国。
大正 13 (1924) 年	第四高等学校を辞し、広島高等学校教授になる。
昭和 8 (1933) 年	11 月 17 日逝去。

(日野 2009 ; 島根県文学館推進協議会 (編) 2010; 染村 2001 をもとに作成)

大谷は生まれつき聡明な人物だった。島根県文学館推進協議会 (編) (2010) によると、「島根県尋常中学(旧制松江中)入学以来、常に成績は首席」だったとのことである。旧制第三高等学校(現 京都大学)に進学した彼はそこで

高浜虚子（1874~1959）、河東碧梧桐（1873~1936）と同級となり、彼らの俳句の才能に感銘を受けた。二人との出会いが大谷の人生に大きな影響を及ぼすことになった。

当時の学制改革により大谷は旧制第二高等学校（現 東北大学）に移籍し、卒業後、東京帝国大学へ進学した。帝大では英文学を専攻しながらも、俳句への熱情も維持し続け、子規庵句会で句作活動を続けた。卒業後、大谷は大学、旧制中学で教鞭をとった後、金沢の旧制第四高等学校（現 金沢大学）の教授に任命された。

金沢でも英文学を教えつつ、句作も継続し、子規派句会の「北声会」を指導した。弟子には作家 室生犀星（1889~1962）がいた。留学から帰朝した後、彼は四高に復職し、さらに10年余り英文学を講じたが、その後、広島高等学校に転じた。このように大谷は一貫して、英語・英文学と俳諧との「二刀流」を貫いた人だった。

では、そんな大谷にとって英語音声（学）はいかなる位置を占めていたのか。彼の英語学習歴で注目すべきは、表1に示したように Lafcadio Hearn（ラフカディオ・ハーン、ヘルン、小泉八雲；1850~1904）から、島根県尋常中学及び東京帝国大学において二度にわたって指導を受けたという稀有な経験である。単に英語母語話者というだけではなく、文学の鬼才 Hearn から **Direct Method** で英語を習ったということは、音声面での学習の機会という点において大谷はすこぶる恵まれた英語環境にあったと傍目には思えるが、実際にはどうだったのか。

実は Hearn 自身、英語音声を授業の主軸にはしていなかったということが教え子の回想からは窺えるのである。『小泉八雲全集』（1926）を大谷とともに訳したひとり、英文学者 落合貞三郎（1875~1946）は；

ヘルン先生の授業は、読方と書取と作文の三課目であった。…

書取の場合は、先生が読まれるのを順番に一人ずつ黒板へと出て書く。先生が直される。私たちはそれを写す。これは耳で聴きとる力

の養成にはよい練習であったと思う。(梶谷 1998 : 66)

と述懐している。Hearn の授業は読み方 (音読)、作文と書き取りが中心だったのである。梶谷を裏打ちするように、別の同級生 角田も次のように述べている。

会話はおおむね作文といってよく、題を与えて即席に作らせ、早く提出した者に文法上の誤りを指摘し、皆に示して教える方法も取られた。読み方は、ハーンが一度朗読し、生徒に一節ずつ大声で朗読させる。このとき、発音、アクセント、イントネーションに気を付けさせる。(角田 1996: 8)

角田もまた、Hearn の授業は作文が中心で (ローゼン・西川 2007)、音声に関してはわずかに読み方と Hearn のあとについて繰り返す手法 (すなわち Listen-and-repeat) が用いられたことを記している。同級生の回想にあるように松江時代の 大谷には音声的な意味での英語音声学への覚醒はなかったと考えても良いようである。

帝大進学後、大谷は再び、さらなる「英語環境」を与えられた。日本人初の言語学者である上田 萬年 (1867~1937) の「音声学」を受講し (日野 2009)、さらにプライベートでは帝大に移った Hearn の翻訳アシスタントを務める幸運に恵まれたのである (西田 1999; 風呂 2006)。当代きっての言語学者から音声学の基礎理論を学び、英語母語話者のアシスタントを通して、「生の英語」に触れるという点において、大谷はどこまでも幸運だった。しかしながらそうした環境要因が大谷自身の音声への興味を掻き立てことにはならなかったというのが真実のようである。

2. 2 大谷の留学

英語音声にさほど興味がなかった大谷が明治 42 (1909) 年に文部省 (官費) 留学生として渡英し、Jones の講座に出たのは「歴史の綾」だったのか。表 2

は文部省留学生に選ばれた人々のリストだが、大谷は錚々たるメンバーに名を連ねていたことが分かる。

表 2：文部省留学生（英語英文学関係）

明治 15 (1882) 年	(米国) 山川捨松 津田梅子
明治 33 (1900) 年	(英独) 神田乃武 (英国) 夏目金之助 (漱石)
明治 34 (1901) 年	(英国 3 年) 茨木清次郎 (米国 3 年) 岡田美津 (英独 3 年) 岡倉由三郎
明治 35 (1902) 年	(英国 3 年) 平田喜一
明治 36 (1903) 年	(英国 2 年) 永野武一郎 (英仏独 2 年) 栗野健次郎 (英米 2 年) 杉森此馬
明治 39 (1906) 年	(英米 2 年) 長屋順耳
明治 40 (1907) 年	(英国 1 年) 上田敏 (英米 2 年) 本田増次郎 (英米 3 年) 小此木まつ
明治 41 (1908) 年	(英米独 3 年) 野田義夫
明治 42 (1909) 年	(英米 2 年) 小松原隆二 <u>大谷正信</u>

(櫻井 1936; 渡辺 1977)

留学生に選ばれること自体、大谷が優秀で将来を嘱望された教師だったことを物語るものだが、日野（2009）は大谷が選出された背景には文部省専門学務局長の上田萬年の「力添え」があったと指摘している。一方、染村（2001）は大谷の帝大、旧制第四高等学校を通した先輩で、明治 34（1901）年に米国留学を果たした文部省視学官 茨木清次郎（1876~1955）の力添えがあったのではという説を提起している。

いずれにしても大谷は海を渡り、ロンドンへと着いた。留学生活、模様、暮らしぶりは大谷（1933）に詳しいが、やはり冒頭で述べた英語音声学に特別な興味を抱かなかった彼が、なぜ Jones の講座に出たのかという疑問は残

る。推測の域は出ないが、それには純粋な学問への探究心というよりは一種の「ならわし」のようなものであったと大谷自身の回想から読み取ることができる。

日本から英語研究の為め英国に赴く者は、一度は先生の講演に列するようであります。私もその数に洩れず、一年間先生の講義を聴きました。(大谷 1915 第 34 卷 第 1 号 : 13)

ここから大谷がロンドンに留学した明治 42 (1909) 年以前には、Jones は日本の英語関係者には良く知られた存在だったことが推察できる。英語音声学の普及といえば大谷より先にロンドンで学んだ岡倉由三郎 (1868~1936)、杉森此馬 (1858~1936) あたりが「伝搬者」として思い浮かぶが (表 2)、確証はない。

さらに大谷の場合、切実な経済的理由があり、そのため Jones の講座内容を含む、英国滞在記を複数のメディアに持ち込む必要性があったようである (大谷 1933: 10)。

…文を売って留守居の者共の生活の資をつくり与えざるを得なかった。「報知新聞」に書いた。「太陽」に「英語青年」に書いた。「中央公論」は殆ど毎号自分の小品や紀行を掲げた。

以上のように大谷は英語／英文学教授として生き、かつ俳句の達人であったことには変わりないものの、彼自身、英語音声 (学) に特別な興味・関心を抱いた人物ではなかったと帰結できる。

3. Jones の音声学講座

3. 1 Jones の略歴

この項から大谷が受講した Jones にシフトして、論考を続ける。「音声学の

父」と称される Daniel Jones の略歴は以下のようにまとめられる。

表 3：Jones の略歴

明治 35 (1903) 年	Cambridge University 数学科卒業 (BA)
明治 37 (1907) 年	同大学院修了 (MA)、弁護士資格取得
明治 38 (1908) 年	University College London Lecturer in Phonetics
大正 4 (1915) 年	UCL Reader
大正 8 (1919) 年	UCL Professor of Phonetics、
昭和 24 (1949) 年	UCL Emeritus Professor
昭和 25 (1950) 年	IPA 会長
昭和 43 (1967) 年	没

(三浦 2004 ; 佐々木・木原 1995)

Jones は Cambridge University King's College で数学を専攻し、同大学院で修士号と弁護士資格を得たが、その後、パリの高等研究実習院 (École pratique des hautes études) に留学し、Paul Passy (1859~1940) のもとで音声学を学んだ。Passy は後に International Phonetic Association (国際音声学会、IPA) を創設することになる。娘との結婚で Passy は Jones の義理の父となった (三浦 2004)。

高等研究実習院で音声学を学んだ Jones は明治 38 (1908) 年に UCL の講師となり、フランス語音声学を担当した。Jones は大谷がロンドンに入った明治 42 (1909) 年には非英語母語話者のための基本的な英語音声学の入門書 *The Pronunciation of English* (1909) を著している。大正 3 (1914) 年には Reader (現在の准教授に相当) のポジションに就いた。大正 6 (1917) 年には英語発音辞典 *English Pronouncing Dictionary (EPD)* を、翌年には名著として誉れの高い *An Outline of English Phonetics* を続けざまに出版した。両書は

やがて丸善の「目玉商品」として日本にも輸入され、国内での大正音声学ブームの起爆剤となった。Jones はさらに大正 10 (1921) 年には UCL の音声学科の主任教授に昇進した。

3. 2 内容

大谷の連載はロンドンから帰国後の大正 4 年 10 月 1 日 第 34 卷 第 1 号から大正 5 年 12 月 15 日 第 36 卷 第 6 号にわたって掲載され、計 30 点に及んだ(資料 1)。連載は講座の要約と大谷によるコメントで構成され、「一言も漏らさずに筆記した」(大谷 1915 No. 1: 13) と記している。

彼が受講した講座は文部省留学の年度から考えると明治 42 年～明治 43 (1909～1910) 年の非英語母語話者向けのものだったと推測される。一連の講座の流れは以下のようなものだった。

表 4 : Jones のシラバス (大谷による)

序論
I. Standard Pronunciation.
II. Organ of Speech.
III. Classification of Sounds. Classification of Consonants. Classification of Vowels.
IV. English Speech Sounds in Detail.
V. English Speech Sounds in Detail. 半母音 母音詳説
VI. Length.
VII. Stress.
VIII. Intonation.
練習

講座は講義 (Lecture) に 1 時間、実習 (Practicum) に 1 時間 (主な活動は Dictation、朗読など) という 2 部構成であった。

…先生は一時間を講義にあて、次の一時間を実習に供され、実習には先生の *The Pronunciation of English* の Part II を用いられたり。… (中略) …しかし先生は時々同書に載りいらざる文章を朗読して、我等学生をして phonetic transcription の符号にて書き取らしめ、それを点検し、更にその文章を我々をして朗読せしめて発音を正し、種々注意を述べられたり。(大谷 1916 No. 26: 49)

うち講義は主に「音声項目の解説→例示→発音演習」という流れで行われ、実習は「Phonetic Dictation (現在で言う ear-training) →朗読(音読)」が一般的だった。さらに実習には Jones 本人のほか「Afzelius 氏、Cruisinga 氏が協力した」とも述べている。ちなみに講座は現在も UCL の Summer Course in English Phonetics (SCEP) で受け継がれており、講義と実習 (Lecture & Practicum) という構成もそのまま維持されている。

講座は Sweet 以降の音声学研究の発展を受け、科学的な音声学研究の成果を受けたものであった。講義での音声項目の紹介は主に；

1) 音素索性・環境、2) 調音様式 舌の動き、位置、様態、3) エラー状況 (地域性、外国人) という 3 つの観点から解説が行われた。例をとると；

表 5 : III. Classification of Vowels.

6	p. 182、大正 4 年 12 月 15 日 第 34 巻 第 6 号	III. Classification of Vowels.
<ul style="list-style-type: none"> ・ 母音の分類は舌の主要部の位置による ・ 舌の最高部の位置に従って区別するのが便宜 ・ front vowel (前母音)、back vowel (後母音)、mixed vowel (央母音) ・ closed vowels (合母音)、open vowels (開母音) ・ 三分の一だけ下がった母音 half-closed vowels (半合母音) ・ 三分の二だけ合のときよりも下がった母音 half-opened vowels (半開母音) ・ 母音表 (省略) ・ open-close 筋肉を締めるか締めぬか tense vowels、lax vowels 		

のように母音の音素素性・環境からはじまり、調音様式、舌の動き、位置、様態、さらには closed vowel から tense / lax までの説明がある。これらは科学的音声分析による記述であり、明らかに Sweet からの研究成果とその後の IPA の成果が反映されている。さらに外国人のエラー状況としては以下の表 6 に示されているように；

表 6 : III. Classification of Sounds.

4	p. 120、大正 4 年 11 月 15 日 第 34 卷 第 4 号	III. Classification of Sounds.
<ul style="list-style-type: none"> ・ドイツ人が一番発音しかねる音 b d g v z ʒ ð ・こんな音で終わる語には初めは extra vowel を加えて発音し、漸次その vowel を縮め弱めて最後に正音を出す練習が良い add æda → æd ・日本人には extra vowel をつける悪癖あり。注意。(大谷) 		

これは非英語母語話者がどのような箇所発音に躓く傾向があるのかのエラー予測に基づいた解説であった。ここではドイツ人英語話者が取り上げられ、彼らに共通する発音のエラーとその対処法が述べられている。ちなみにこの箇所で大谷は日本人学習者向けの解説を加えている (Epenthesis、添加現象)。これらの例からも Jones の講座は徹底的に実践指向であり、単に音声学の理論を提示しているのではないことが窺える。

こうした Jones の姿勢は演習においても守られ、演習ではとくに、1) 人工概念 (基本母音図、子音図) で認知する、2) 問題点の指摘 → 比較、3) 正音の出し方 (修正工夫方法) を 3 つの柱としていた。

表 7 : IV. English Speech Sounds in Detail /k, g/.

8	p. 244、大正 5 年 1 月 15 日 第 34 卷 第 8 号	IV. English Speech Sounds in Detail.
---	-------------------------------------	--------------------------------------

- ・ kとg
- ・ 舌の後部と軟口蓋で出す音
- ・ 外国人中、舌の後部と中口蓋で出す者あり
- ・ caseをkeisと正しく発音しかねる人は、kの後にoがある積もりで、そのoを出さずに直ぐeisと発音すると正音が出る。
- ・ act k音の後にt音の来る場合には、kを完全に発音しない。外国人はkを完全に発音しておいてt音に移るが、それは正しくない。前の子音（ママ）を長く引張っておいていて破裂させずに急にtへ移ってしまうと正音が出る。

子音の /k/ と /g/ を扱ったこの回でも、音声項目の解説→例示→発音体験、正音の取り方が堅守されている（資料2）。

以上のごとく大谷が伝えた「Jones 音声学」は英語音声学理論然としたものではなく、むしろその真髄は実用主義にあったと考えても差し支えない。しかもそれは「実用のための実用」ではなく、音声への科学的究明をもとにした理論が最初にあり、英語発音の学習への「近道」を提示したものであったのである（Ashby 2011）。

4. おわりに

最後に英語音声教育史の流れという観点の中から大谷と Jones の残したものを総括しておく。大谷はいわゆる「音声学の学徒」ではなく、教授法に变革をもたらすという意図もそれほどなかったと思われるが、本人が企図しない「功績」を英語音声教育に残したと帰結できる。

大谷がロンドンへと赴いた明治末期は英学熱のブーム一過とともに、教師が上級学校の受験対策のために変則式の指導を強固なものにしはじめた時代だった。変則式で育った者はペーパー（紙の上）としての英語には強いが、それは「真の英語力」とは言えるものではなかった。「中途半端な英語力」の学生が実社会へと巣立ちはじめ、英語音声を含む英語の実践的な能力の不足を嘆く声は音声中心の practical English を求める教授法改良の「うねり」

となった。大谷の連載にはそうした明治末の日本の英語教育の実態がはしばしに盛り込まれている。

音声学の創始者はまぎれもなく Henry Sweet ではあろうが、Jones は Sweet の考えを敷衍、拡大し、English as a Foreign Language (EFL) という概念がまだ未発達時代において、英語を母語としない人への音声教育をもその視座に入れていたのである⁴⁾。英語非母語話者を見据えた Jones の「まなざし」は名著 *An Outline of English Phonetics* においてははっきりと確認できる (Abercrombie 1991)。大谷が受講した Jones の講座はまさに「応用音声学」のさきがけだったと言える。

このように見てくると、Jones の音声学は実用主義を標榜したのにもかかわらず日本の教育ではその実践的側面が編集され、薄められたのはなぜかという疑問が残る (松岡 2006)。これは、Jones の理想を日本で広めようとした H. E. Palmer (1877~1949) が音声面での変革をなぜ遂行できなかったのかという疑問と相俟って、今後の課題であると考えている。

謝辞

本稿は平成 24 年度専修大学国内研修制度による研究成果の一部である。ここに記して謝意を表したい。

注

- 1) 本稿は、日本英学史学会第 49 回大会 (2012 年 10 月 12 日、和歌山大学) および日本英語教育史学会第 31 回全国 (九州) 大会 (2015 年 5 月 16 日、久留米高等専門学校) における 2 つの口頭発表をもとにしたものである。原文中の漢字、表現はできるだけ現代のものに改めた。
- 2) 大谷に関する研究は Lafcadio Hearn のもの (風呂 2006)、英文学者としてのもの、さらには俳人 大谷繞石 (ぎょうせき) としてのもの (日野 2009) に分かれる。
- 3) 島根県立図書館、松江市立中央図書館、島根大学附属図書館などで資料を

収集した。

- 4) Bernard Shaw の Pygmalion (映画 My Fair Lady) の主人公「Henry Higgins は Sweet である」と Shaw 自身はその序論で述べているが、映画を観る限り、実際の音声指導の内容は Jones のものが採用されているようである。実際、ロンドン学派 (London School of Phonetics) には実際には Jones がモデルになったのではないかという説を唱える学者もいる (Collins and Mees 1989; Jenkins 2002)。

参考文献

- 大谷繞石 (1913~1914) 「ヂョウンズ先生の英語発音学」『英語青年』第 34 巻 第 1 号～第 36 巻 第 6 号。
- 大谷繞石 (1933) 『己がこと人のこと』春陽堂。
- 大村喜吉 (1957) 「<英学史の一断面>発音記号の移入-マックローの事績-」『英語教育』No. 6, pp. 259-260.
- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓 (編) (1980) 『英語教育史資料 5 英語教育事典・年表』東京法令出版。
- 梶谷泰之 (1998) 『へるん先生 生活記』恒光社。
- 角田洋三 (1996) 「教師としてのハーン」八雲会 (編) 『へるん』第 33 号, pp. 7-9.
- 片山寛 (1935) 『わが国に於ける英語教授法の沿革』研究社。
- 櫻井役 (1936) 『日本英語教育史稿』(復刻版)文化評論出版。
- 島根県文学館推進協議会 (編) (2010) 『人物しまね文学館』山陰中央新社。
- 染村絢子 (2001) 「小泉八雲と周囲の人々」金沢大学『資料館紀要』第 2 号, pp. 7-47.
- 竹村覚 (1933) 『日本英学発達史』研究社。
- 田邊祐司 (2015) 「日本英語音声教育史：大谷正信が伝えた Daniel Jones の音声学講義」日本英語教育史学会第 31 回全国 (九州) 大会 発表資料 5/16/15 久留米高等専門学校。

- 田邊祐司 (2016) 「日本英語音声教育史：大正音声学ブームをめぐる」 日本英語教育史学会第 32 回全国 (東京) 大会 発表資料 5/16/16 東京電機大学 .
- 田邊祐司 (2010) 「日本英語音声教育史：杉森此馬の指導観」『英學史論叢』第 13 号, pp. 13-26.
- 田邊祐司 (2005) 「英語発音指導の日本での歴史的展開」日本英語音声学会 (編) 『英語音声学辞典』成美堂, pp.102-03、
- 田邊祐司 (2004) 「英語音声研究・指導の変遷 (PART 2)」『英語学論説資料』第 36 卷 (英語教育) 第 6 分冊, pp. 341-349.
- 豊田實 (1939) 『日本英學史の研究』岩波書店 .
- 西田園夫 (1999) 「大谷正信点描-ハーン逝去の前後」『へるん』第 36 号, pp. 68-70.
- 日野雅之 (2009) 『松江の俳人 大谷繞石-子規・漱石・ハーン・犀星をめぐる』今井出版 .
- 風呂鞆 (2006) 「Literary Assistant としての大谷正信」日本英学史学会中国・四国支部 平成 18 年度支部総会・第 1 回 (通算 54 回) 支部研究例会報告資料 (平成 18 年 5 月 28 日, 広島県立生涯学習センター視聴覚室).
- 松岡正剛 (2006) 『日本という方法-おもかげ・うつろいの文化』NHK 出版 .
- 三浦弘 (2004) EPSJ (編) 「The International Phonetic Association」『英語音声学辞典』日本英語音声学会, pp. 108-109.
- 皆川三郎 (1967) 「大正期の英語参考書」『英語教育』2 月号, p. 17.
- 宮田幸一 (1967) 「大正期の発音学」『英語教育』2 月号, p. 21.
- ローゼン, アラン・西川盛雄 (2007) 『ラフカディオ・ハーンの英作文教育』弦書房 .
- 渡辺実 (1977) 『近代日本海外留学生史上・下』講談社 .
- Abercrombie, D. (1991) "Daniel Jones's Teaching." *Fifty years in phonetics*. Edinburgh University Press.
- Ashby, M. (2011) "The earliest links between Japan and the UCL phonetics department." Lecture at the 28th JACET Chubu Chapter Conference (June

- 14th, Chubu University).
- Collins, B. S. & Inger Mees (1989) *The real professor Higgins: The life and career of Daniel Jones*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Jenkins, J. (2002) Review: *The real professor Higgins: The life and career of Daniel Jones*. *ELT Journal*. 208-211.
- Jones, D. (1918). *An outline of English phonetics*. Leipzig: Teubne.
- Jones, D.(1917). *An English pronouncing dictionary*. On strictly phonetic principles. London: Dent.
- Tanabe, Y. (2006). “English Pronunciation Instruction in Japan: A Historical Overview” 『英語と英語教育』特別号 小篠敏明先生退職記念論文集, 45-54.
- Tanabe, Y. (2000). “Learning and Teaching of English Pronunciation: A Retrospection in Japan (Part 1)”. *The LCA Journal*. 16. 1-24.

資料 1：連載の概要

数	掲載巻・号	タイトル	メモ
1	p. 13-14、大正 4 年 10 月 1 日 第 34 卷 第 1 号	はしがき 序論	外国人のための講義 Phonetics とは 綴り字と発音の違い
2	p. 47-48、大正 4 年 10 月 15 日 第 34 卷 第 2 号	序論 (続き) I. Standard Pronunciation.	綴り字と発音の違い symbol 標準発音とは
3	p. 76、大正 4 年 11 月 1 日 第 34 卷 第 3 号	II. Organ of Speech.	音声器官
4	p. 120、大正 4 年 11 月 15 日 第 34 卷 第 4 号	III. Classification of Sounds.	noise、voice vowels、consonants 練習法 (the little dogs、 nation、fvfv、szsz、θ ð θ ð、Tennyson)

5	p. 153、大正 4 年 12 月 1 日 第 34 卷 第 5 号	Classification of Consonants.	Plosive、Nasal、Lateral、Rolled、Fricative、水音 (Liquid)
6	p. 182、大正 4 年 12 月 15 日 第 34 卷 第 6 号	Classification of Vowels.	舌位 Front-Mixed-Back open-close 弛緩
7	p. 216、大正 5 年 1 月 1 日 第 34 卷 第 7 号	IV. English Speech Sounds in Detail.	本号から Jones の The Pronunciation of English との overlapping は省く p/b、t/d、-ed
8	p. 244、大正 5 年 1 月 15 日 第 34 卷 第 8 号	V. English Speech Sounds in Detail.	k/g、Glottal Stop
9	p. 274、大正 5 年 2 月 1 日 第 34 卷 第 9 号	V. English Speech Sounds in Detail.	m、ŋ、sing、singer、singing、stronger
10	p. 304、大正 5 年 2 月 15 日 第 34 卷 第 10 号	V. English Speech Sounds in Detail.	l、練習には health、困難なのは old
11	p. 335、大正 5 年 3 月 1 日 第 34 卷 第 11 号	V. English Speech Sounds in Detail.	r、jaw-draw、chain-train
12	p. 366、大正 5 年 3 月 15 日 第 34 卷 第 12 号	V. English Speech Sounds in Detail.	摩擦音 f/v、θ /ð、そのルール
13	p. 13、大正 5 年 4 月 1 日 第 35 卷 第 1 号	V. English Speech Sounds in Detail.	s/z、そのルール
14	p. 46、大正 5 年 4 月 15 日 第 35 卷 第 2 号	V. English Speech Sounds in Detail. (続き)	ʃ/ʒ、
15	p. 79、大正 5 年 5 月 1 日 第 35 卷 第 3 号	V. English Speech Sounds in Detail. (続き)	頁半分 h (「繞石曰、我々英語の教授を為して居る者は殊に之に注意して stress のある場

			合と無き場合に依じて strong と weak との適当な発音を教えなければならぬと思う。中学校あたりで充分之に注意して教えて居る人が甚だ少ないように余には察せられる。』)
16	p. 114、大正 5 年 5 月 15 日 第 35 卷 第 4 号	半母音 (semi-vowels)	w、j
17	p. 150、大正 5 年 6 月 1 日 第 35 卷 第 5 号	母音詳説	i:、i、e、ε
18	p. 175、大正 5 年 6 月 15 日 第 35 卷 第 6 号	母音詳説 (続き)	æ、a、
19	p. 213、大正 5 年 7 月 1 日 第 35 卷 第 7 号	母音詳説 (続き)	αɔ
20	p. 239、大正 5 年 7 月 15 日 第 35 卷 第 8 号	母音詳説 (続き)	頁半分 o (「我々日本人は此 ou を発音しかぬるようなり。教科書朗読練習の際余自らも幾度か Jones 先生に質されしことを自白す。…」)
21	p. 278、大正 5 年 8 月 1 日 第 35 卷 第 9 号	母音詳説 (続き)	頁半分 u: 文字と発音のルール
22	p. 303、大正 5 年 8 月 15 日 第 35 卷 第 10 号	母音詳説 (続き)	u ə: ə
23	p. 342、大正 5 年 9 月 1 日 第 35 卷 第 11 号	母音詳説 (続き)	長音 生起ルール

24	p.366-367、大正5年9月15日第35巻第12号	VII. Stress.	1頁半 ストレスルール
25	p.21、大正5年10月1日第36巻第1号	VIII. Intonation.	rising intonation、falling intonation
26	p.40、大正5年10月15日第36巻第2号	VIII. Intonation. (続き) 練習	Jones の講義はここま で以下、実習 朗読、 phonetic transcription、 朗読、訂正
27	p.77、大正5年11月1日第36巻第3号	練習	1/4 頁
28	p.115、大正5年11月15日第36巻第4号	練習	1/4 頁
29	p.145、大正5年12月1日第36巻第5号	練習	1/4 頁
30	p.174、大正5年12月15日第36巻第6号	練習	

資料2 : Jones の講座 (抜粋)

9	p. 274、大正5年2月1日第34巻第9号	V. English Speech Sounds in Detail.
<p>・ woman</p> <p>・ mとnの後に明らかに用ゆるəの音があるのに、それを発音する外国人があるから特に注意する。</p> <p><u>繞石曰、日本人は眼から学ぶ人が多いから、woman を wumn と発音するやうな人はほとんどない。a があると眼で見えて知っているから、かえて wuman とやうな謝った発音をする恐れがある。season を si:zən なんて発音させないよ</u> <u>うに注意しなければならない。)</u></p>		

15	p. 79、大正 5 年 5 月 1 日 第 35 卷 第 3 号	V. English Speech Sounds in Detail.
<p>・外国人の困難を感じる発音はhの後へjの来ている発音のようだ。 huge hju:dʒ</p> <p>・こんな語は摩擦が充分にきこえるように発音しなければならぬ。</p> <p>・hの発音についてなほ言うべきことは、教育ある人士でも普通の会話の折hをぬかして発音する語があることである。必ずしもvuglarとは言えぬ。had、have、him、herのやうなsmall wordは、その語にstressの無い折は決してhを響かさぬ。</p> <p>・所謂weak formをその適當の場合に用いることが頗る肝要だ。</p> <p><u>(「繞石曰、我々英語の教授を為して居る者は殊に之に注意して stress のある場合と無き場合に依じて strong と weak との適當な発音を教えなければならぬと思ふ。中学校あたりで充分之に注意して教えて居る人が甚だ少ないように余には察せられる。」)</u></p>		

16	p. 114、大正 5 年 5 月 15 日 第 35 卷 第 4 号	V. English Speech Sounds in Detail.
<p>・w これは両唇音である。他の両唇音たるp b mと異なる点は、wは両唇を丸めて前に突き出して発することである。勿論両唇を丸めても、舌の位置は勝手になるのだが、真のw音を出す時の舌の位置は、後方が上がって軟口蓋へ向いていなければならぬ。ほとんどuと同一様である。正しいw音のせぬ人はlong uを練習するがよい。</p> <p>wellはwelだがこれを u:el weはwi:だがこれをu:iだと仮に考えて、長く緩く発音して、初のu:を段々縮めて発音すれば正音が出よう。</p>		

17	p. 150、大正 5 年 6 月 1 日 第 35 卷 第 5 号	母音詳説
<p>day fame</p> <p>・多数の外国人はこの種の二重母音をば、tenseにe:と発音する悪癖あり。(日本人など殊に然るようなり、繞石)</p>		

20	p. 239、大正 5 年 7 月 15 日 第 35 卷 第 8 号	V. English Speech Sounds in Detail.
<ul style="list-style-type: none"> • ou • 「我々日本人は此 ou を発音しかぬるようなり。教科書朗読練習の際余自らも幾度か Jones 先生に質されしことを自白す。…」 <p>told (tould)、 gold (gould)、 coat (kout)、 goat (gout)、 moment (moument)、 motion (moufən)、 notion (noufən) (以下省略)</p>		